

---

# 冬雪

貂寡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冬雪

### 【著者名】

貂寧

N2868D

### 【あらすじ】

クリスマス・・・・・・」の響きを聞くと夢と希望を思って出す・・・・

・・私と彼の恋の話・・・・

冬がすぎたら何が来るのだろう

季節で言えば春だけど・・・

私の場合は、冬が過ぎるとただ単に虚しさだけが残る・・・

秋、私は恋をした・・・

一生に一度と言つて良いような最高の恋だった・・・

そして何より、私の初恋だった・・・。

同じクラスで、2ヶ月を過ごしていたのに名前を知らない男の子・・・

・・・

だけど、良いところはたくさん言える・・・

たとえば、あの楽しそうに笑っている笑顔が良い・・・

たとえば、彼の周りに漂っている冷たい雰囲気が大好きだ・・・

他にもまだまだ言える・・・

授業中目にはいるような輝きを持っている・・・

そのおかげで、私は先生にしかれっぱなし・・・

それでも見ていたい・・・あの冬の日に降り注ぐ日光のようにまぶしい彼を・・・

本当に・・・大好きで、大好きでたまらなかつた・・・。

僕は、ある女子が好きです・・・。

このクラスになつて一度も話をしたことがありません……  
しかし、大好きです……。

彼女は、暖かい空気をあたりに漂わせて  
まるで冬の合間の小春日和のようでした……。

しかし、僕は知つていました……。

彼女と付き合つても、決してうまくはいかないことを……。

僕は、真冬の氷のように冷たい人です、

彼女のように温かい人に近寄るどんどんとけてします。  
雪だるまが、太陽によって溶かされてしまつようになります。

しかし、僕は彼女が大好きです……。

私は、もしかしたら彼に嫌われているのかもしれない……  
近づくと、いつも逃げてしまふ……。

そういう毎日が続くとネガティブ思考まつしげらになる……

ネガティブになると彼が近寄ってきて少し距離が近くなる……。

僕は、彼女の暖かさが心地よいです……。  
しかし、あまり心地よくいると僕が溶けていくことを知り  
怖くなつて、彼女から遠ざかります……。  
遠ざかると、彼女は寂しそうにして  
暖かさが弱くなるので、その時になるとまた僕は、近づきます……。

その繰り返しを、毎日のように繰り返しては僕がだんだん僕では無

くなつていきます・・・

その時は、いきなり影を落としてクラスから孤立し・・・  
雪だるまを再形成していくのです・・・・・

僕は、もしかしたら彼女に嫌われているかもしません・・・・・。

私は、思い切つて友達に相談することにした・・・  
友達と言つても、2～3人ぐらいの物なんだけど・・・  
彼は、誰かのことを好きなんだろうか・・・  
私のことをどう思つているのか・・・  
そして私の心に気づいているのだろうか・・・

僕のところに、女子が何かを聞きに来ました・・・。  
僕の好きな人は・・・とか、起野辺優那きのべ ゆうなを知つてているのか・・・とか

色々と質問攻めに会いました・・・  
そこで彼女の名前を知りました・・・

起野辺 優那・・・・

良い名前だなつと想いました・・・

私は、彼が私を知らなかつたことがショックだつた・・・。  
友達からの報告によると、名前は山岳葵さんがくあおい

好きな人は、隣のクラスの加賀奈緒子

かがなおこ

好きな人が、隣のクラスにいるなんてびっくりで  
その人がこの学校一の超美人だったとは・・・

そして・・・私の片思いと思われるこの初恋は幕を閉じたかと想わ  
れた・・・。

僕は、嘘を言った・・・。

前から言っていたように彼女、起野辺優奈が好きです。

だけど、このことを彼女に気付かれる少し考えさせられます・・・

・

まだ、僕は覚悟ができていません・・・

僕が溶ける心の準備・・・

彼女を受け入れる準備が・・・

・

私は、落ち込んだ・・・・・  
悲しかつた・・・・彼に好きな人がいてその人が、私の友達だつたか  
らだ・・・

友情と恋、どっちをとればいいのだろう・・・・・  
どうしたらいいのだろう・・・・・

もう1ヶ月たつ・・・・・

僕は、まだ決心が立つていません・・・・

彼女とどう接するべきか・・・・僕は、どうしたらいいのか・・・・

どうしたら・・・・・・

私は、まだ彼の心をのぞいていない・・・・・  
どうしたら心を開いてくれるのだろう・・・・・  
私は、どうしたら・・・・・・  
頬に涙がたれる・・・・・

僕は、決心をつけた・・・あれからもう2ヶ月が過ぎようとしていた・・・  
もう、僕がどうなっても良い・・・彼女の側にいたい・・・  
そして彼女のぬくもりを知りたい・・・

私は、彼にこの気持ちを伝えることに決めた・・・  
彼に伝える・・・

「山田くんちよつと良いかな・・・? ? ? ?」

「はい、なんですか・・・起野辺さん」

「起野辺じゃなくて、優那で良いよ・・・あのさー今日話したいことがあるんだけど・・・」

校門で待つてくれない・・・? ?」

「はい・・・実は僕も話したいことがあるんですよ・・・では、放課後に校門ですね・・・」

「うん、よろしく・・・」

二二九  
・・・

僕は、うれしいです。

彼女と話すこともできましたし、なつかつ彼女のことを優那と呼ぶ  
許可が出たからです・・・・。

この機会を生かして、  
・・・

チャイムが鳴り……教室にいた生徒たちが歩いて出て行く……

校門には、彼女がいました。・・・。

後ろ姿を見るとまるで、天使が降りてきたみたいでした・・・。長くつやのある黒い髪の毛は、男である、僕にとつては脅威でした・。

その髪の毛と制服のセーラーが輝いて見えます・・・・。

振り返るとさきに長い髪が風になびいて目に毒でした。・。・。・。

彼が、歩いてくるのが見えた。・。・。

少し恥ずかしかつた。・。・。けど、決心をつけた  
彼にいくら断られても良い私は決めたのだ。・。・。  
彼のこの気持ちを伝えることを。・。・。・。

僕は、近づいて話しかけることにしました。・。・。  
「優那さん。・。・。遅くなつてすみません。・。・。・。」

「いいよ、今来たところだから。・。・。それより。・。・。  
話したいことがあるつて言つてたよね。・。・。先に私から話しても  
いいかな。・。・。」

「はい良いですが。・。・。・。」

「あのね、前から言おうと想つてたんだけど。・。・。私。・。・。  
葵くんのこと好きだつたんだ。・。・。けどね、加賀さんが好きだつた  
つて聞いたとき、私諦めようとした。・。・。・。  
だけど。・。・。諦められませんでした。・。・。ずっと好きなんです。・。

私は、どんなこと言われても平氣だから・・・・・・  
質問に答えてください・・・・・あなたの本当に好きな人は、誰  
ですか・・・・・

少しの沈黙が・・・・・漂つている・・・・・  
「あなた・・・・・優那が・・・好きだ・・・・・」  
そういうて、僕は彼女を抱きしめました・・・・・

私は、抱きついてきた彼にびっくりして・・・・・  
そして、加賀さんのが嘘だと聞いて・・・・・  
私の頬に何かが伝った・・・・それは、嘘だと聞いた安堵感と  
返事をくれた彼のコメントへの驚きから来る物だつた・・・・・

僕は、うれしかつたです・・・・・  
彼女が僕のことを好きだと言つてくれて・・・・・  
そして、何より・・・・・こうやつて抱きついているのに・・・・・  
いやがりもせずに、僕を溶かしていつてくれました・・・・・  
溶けるのが怖かつたときもありましたが・・・・・

いま、いつやって溶けていくと・・・なんだか居心地が良いです。  
本当に彼女を好きになつて良かったと・・・今になつてつづく想  
います・・・。

私は、涙を拭いた・・・  
彼の体温が暖かかった・・・  
もう冬の気候だ・・・

(空から雪が落ちてくる・・・)

私は、その様子を見入る・・・

クリスマスまで、あと4日・・・・  
空からは、雪が降り注いでいます・・・・

僕は、クリスマスに色付いた商店街の入り口で優那を待っています。  
・・・

今日は、僕と彼女の10回目の記念すべきデートです・・・。

1回目は、話が保たず・・・どう対応すればいいのかさっぱりでした・・・

2回目は、映画を見に行きました・・彼女は、僕の隣で泣いていました・・・

3回目は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

たくさんの出来事があつて、どれも楽しいデートでした・・・

私は、彼との待ち合わせに急いでいた・・・  
国道に面しているので、車の通りが激しい・・・・・  
危ないな・・・・・

彼女が来るのが見えました・・・  
白いマフラーの上には、黒い髪の毛が乗っています・・・。

その長い髪の毛が風になびいて、まるで川のようですが……このとき、僕は絶対彼女を守りたいと想いました……

私は、ツリーの下で待っている彼に気づいて、歩くスピードを速めた……

彼は、今降っている雪よりももつと冷たい雰囲気を漂わせて……

まるで、空からやってきた雪の王子様のようだった……

僕は、彼女の格好にサンタの存在を思い出しました……  
小学校の時は、親が嘘をついて僕の枕元にプレゼントをよく置いては、

サンタさんが来たんだよ……と言つっていました……

今回のクリスマスは、彼女と過ごしたいと想つていますが、  
彼女の返事次第だと思います……

「優那……」

「なに?」

「クリスマスの予定あるんですか?」

「別になじよ、どうしたん？」

「あの、もし良かつたら。クリスマス2人で過ごしませんか？」

「いや、てのは嘘だよー。いじよー。」

「良いんですか？」

「いいよ、暇だし。」

そして、僕は彼女とクリスマスを過ごすことになりました。

クリスマス

プレゼントを交換しました・・・

僕は、彼女にネックレスを渡しました・・・

クリスマス・・・

その響きは、夢や希望を運んでくる・・・

私は今田この田が・・・ずっと続けば良いのにと想つ・・・

「優那・・・このクリスマスがずっと続けばいいのにな・・・

「どうして」

「そしたら・・・毎日優那に逢えるだろ?・・・」

「逢える・・・クリスマスじやなくつても毎日のよひこ・・・」

そう彼女が言う前に、僕は彼女の唇を奪いました・・・。  
もう何回とキスをしています・・・。

「ハ、事を考えてしまうと彼女が怒ります……」

そう、僕はこのとき決めました・・・このクリスマスのようになる日々が毎日、彼女と過ごせるように努力することを・・・

私は、彼と楽しい日々が過ぎ去るよつと・・・

このクリスマスの夜に“誓います・・・・・”

そつじて、今言えることがある・・・・・

私は、冬が過ぎたら虚しさだけが残ると想つていたのに  
今は・・・・・

冬が過ぎたら・・・・・暖かい春が来て・・・・・

虚しさではなく・・・希望と夢が詰まっている・・・・・

暖かい、春や・・・・・希望が生まれる・・・・・

そつじて季節は巡つていく・・・・・  
年月が過ぎて・・・・・  
年をとつていいく・・・・・  
けれど彼と・・・・・一生を過ぎしたい・・・・・



(後書き)

- 最後までお付き合っていただきありがとうございました・・・
- この作品で、春夏秋冬すべての季節を制覇しました！！
- まだ、四季を制覇していない方もした方も是非評価をお願いします・・
- ・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2868d/>

---

冬雪

2010年12月13日19時44分発行